



# 日本海区水産試験研究

## 連絡ニュース

No.387

### 日本海でのマスノスケ再考

辻 俊 宏

#### I はじめに

マスノスケ (*Oncorhynchus tschawytscha*) は北太平洋産のサケ属魚類の中では最も大型であることから、私たちを魅了して止みません。キングサーモンといわれる由縁です。その豊度は主要 7 種では最も低く、産業的な分布域は北米大陸側にかたよっています。アジア大陸側ではカムチャツカ半島の他、北海道および東北地方の太平洋岸で僅かに漁獲される程度で、日本海で本種が漁獲されることは稀です。日本海での漁獲事例については、深瀧（1968 a, b）と加藤ら（1982）に詳しく報告されています。しかし、その後の漁獲事例が話題に上ることは少なかったように思われます。1998年5月に石川県で15年振りに、それも相次いで2尾の親魚が漁獲されました。これを機会に、近年の日本海でのマスノスケの漁獲について聞き取り調査をおこないましたので、その結果を報告します。

#### II 1980年以前の漁獲事例

1980年以前の日本海での漁獲事例は、前出の報告によると、本州日本海側沿岸で19尾、沖合海域で3尾、津軽海峡で1尾および新潟県・山形県の河川で3尾の合計26尾になります（図-1）。沿岸漁獲では、新潟県が最も多くて13尾、そのうちの10尾が佐渡島でした。その他は、青森県が3尾、山形県が2尾、福井県が1尾でした。南

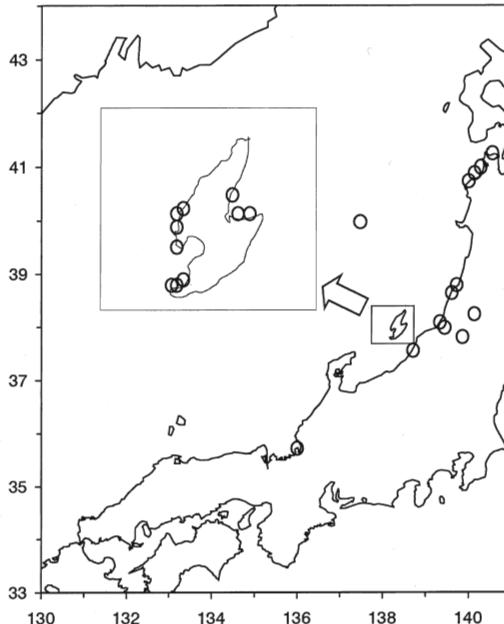


図-1 1980年以前の日本海および日本海側河川におけるマスノスケ漁獲位置

限は若狭湾内の福井県南条郡河野村地先でした。漁獲時期はいずれも3月から6月でした。サイズは未記録のものを除いて全て10kg以上、雌雄判別のなされた12尾のうち雌が10尾、などというものでした。

#### 目

日本海でのマスノスケ再考	1
新・着任の場・所長の挨拶	4
日水研職員の退職・着・転任の挨拶	7
藤本 實 前日水研所長を偲ぶ追悼文	11
会議レポート	15

#### 次

刊行物ニュース	17
所内談話会	17
人事異動	17
編集後記	22

### III 石川県での漁獲事例

(1) 1983年5月4日に能都町七見沖の大型定置網（中田漁業部：身網水深約40m）で尾叉長105cm、体重14.5kgの1尾が漁獲されました。漁獲直後に能登島町の“のとじま水族館”に生きたまま移送されましたが、2日後に死亡しました。現在剥製にして同水族館に展示してあります。雌雄は不明です（図-2）。

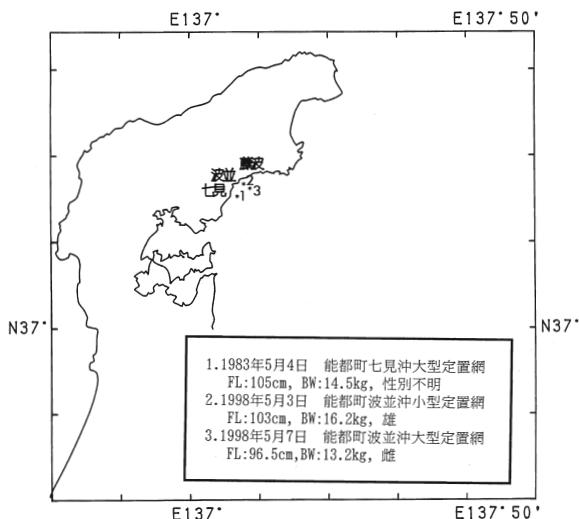


図-2 石川県におけるマスノスケ漁獲位置

(2) 1998年5月3日に能都町波並沖の小型定置網（山田順作：身網水深約20m）で尾叉長103cm、体重16.2kgの1尾が漁獲されました。雄で、地元の料理店に32,400円（2,000円/kg）で引き取られました。

(3) 1998年5月7日に能都町波並沖の大型定置網（波並大敷網組合：身網水深約60m）で尾叉長96.5cm、体重13.2kgの1尾が漁獲されました（写真-1）。雌で、地元の料理店に22,400円（1,700円/kg）で引き取られました。同時期に水揚げされたサクラマス（3kg台）の単価は1,500～1,800円/kgであり、地元で馴染みのないこ

とから同等品にみなされたようです。魚体を買い取った料理店主によると、卵巣の長さはおよそ40cm、赤褐色でサクラマスの筋子（未成熟卵）に似ていたが、味は数段上とのことでした。

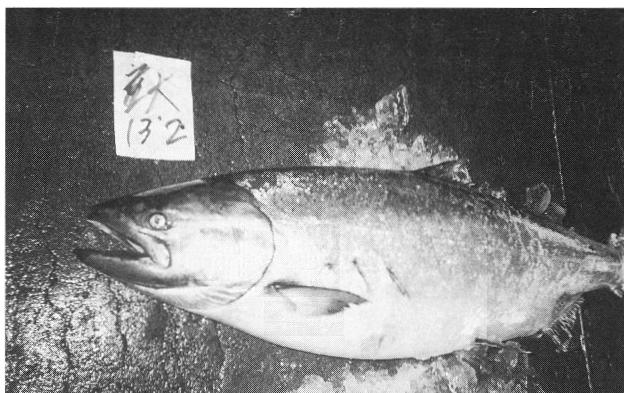


写真-1 1998年5月7日に能都町波並地先の定置網によって漁獲されたマスノスケ

1998年5月に本種が相次いで漁獲された定置網近くに設置してあった自己記録式水温計（Kawamura Co.,Ltd. XLシリーズ）による水深30mの1時間毎の水温変化を図-3に示しました。漁獲前日の午前5時から漁獲日の午前4時までの平均水温をみると、5月4日は13.4°C、5月7日は13.2°Cでした。漁獲日前の5月1日および5月6日に、それぞれ2～3°C急激に降温しており、水塊の移動につれて乗網したとも考えられます。

1998年5月7日に漁獲された個体から7枚の鱗を採取しました。年齢については、偽年輪の有無や淡水生活の年数等を考慮にいれて検討しなければなりませんが、本種のほとんどは3～6歳で成熟（Major et al. 1982）することや、カムチャツカ系の回帰体長（Grachev, 1971）と当該個体の体長（尾叉長96.5cm）を照らし合わせると、6歳前後（満5才）と考えられました。

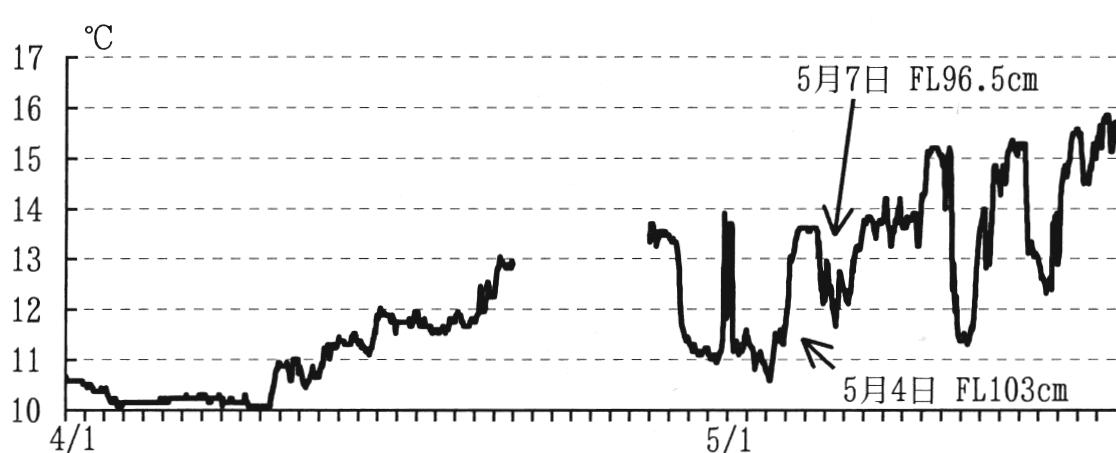


図-3 能都町沖水深30mの水温変化とマスノスケ漁獲状況

#### IV 日本海における漁獲の現況

近年の日本海沿岸における本種の漁獲状況について、聞き取り調査の結果を表-1に示しました。これによると、日本海での漁獲は、北海道から秋田県沿岸までは、数は少ないものの恒常的（毎年）にみられるようです。しかし、山形県以南では非常に稀で、新潟県以南では今回の石川県での漁獲事例を除くと一例に過ぎません。

#### V 考察

今回の聞き取り調査で、日本海でのマスノスケの漁獲は、秋田県以北では少ないとはいえ恒常にみられることがわかりました。深滝（1968 a, b）と加藤ら（1982）ではこの事実に触れられていません。近年になって漁獲されるようになったとは考えにくく、見落としていた可能性があります。さて、日本海で漁獲される本種の起源についてですが、我が国周辺で最も再生産量の多いカムチャツカ系群が、東北地方および北海道の太平洋側を北上回遊する過程で日本海側に迷い込んだと考えるのが最も有力でしょう。しかし、アムール川等日本海をとりまく大陸河川でも遡上・産卵がみられ（Major et al., 1982）ることも無視できません。加藤ら（1982）は、日本海で漁獲されたマスノスケの起源としてそれらの河川を推測しています。いずれにせよ、日本海で漁獲されるマスノスケの起源を推定するに足る証拠を欠いているのが現状です。ただ、深滝（1968 a, b）と加藤ら（1982）で、1958年から1980年の間に新潟県以南の15尾の漁獲事例があったのに対し、その後の18年間で新潟県寺泊の1尾と石川

県の3尾を合わせて4尾に過ぎないのは、近年、日本海で暖海性の珍しい魚種の漁獲事例が続いていることを考え合わせると興味のあるところです。

最後に、聞き取り調査に協力いただいた方々および本文をまとめるにあたって貴重な助言を頂いた日本海区水産研究所の長谷川誠三室長、永沢亨主任研究官、当センターの貞方勉主任研究員に紙面を借りて厚くお礼を申し上げます。

この小文は、漁獲事例の発掘が不十分であった類の話かもしれません、その危険を顧みず批判に供しました。新たな知見などありましたら私まで連絡頂ければ幸いです。

#### 参考文献

- (1) 深滝 弘（1968 a）日本海におけるマスノスケの分布 南限とその起源に関する考察. 日水研報, (19), 29-41.
- (2) 深滝 弘（1968 b）日本海沖合いで漁獲されたマスノスケ. 日水研報, (20), 87-90.
- (3) 加藤史彦・山洞 仁・野田栄吉（1982）日本海におけるマスノスケの漁獲記録. 日水研報告, (33), 41-54.
- (4) R. L. Major et al. (1982) 北太平洋の沖合水域におけるマスノスケ (*Oncorhynchus tshawytscha*) の分布及び豊度 (北太平洋漁業国際委員会). 北太平洋漁業国際委員会研究報告38.
- (5) Grachev, L. E. (1971) カムチャツカ系のマスノスケの成長テンポ (大屋善延訳). 「魚と水」, 6, 39-47.
- (つじ としひろ 石川県水産総合センター海洋資源部  
e-mail:tuzi@nsknet.or.jp)

表-1 聞き取りによる日本海沿岸でのマスノスケの漁獲状況

道 県 名	漁 獲 状 況
北 海 道	5~7月にサクラマス等を対象にする小型定置網により漁獲される。正確な漁獲量は不明だが漁期中に数十~数百kg程度と思われる。10kg以上の個体の他、3~4kgの未成魚も漁獲される。 なお、太平洋側では1~2トン程度の漁獲量と思われる。
青 森 県	定置網により漁獲される。漁獲量は不明だが、それほど珍しくはない。
秋 田 県	定置網により3~5月に漁獲される。盛期には大型定置網で2~3日に1尾程度の割合で漁獲される。
山 形 県	2~3年に1尾程度の漁獲があるとの話を聞くが、記録に残っているのは加藤ら（1982）によるものだけである。
新 潟 県	6~7年前に寺泊の定置網で漁獲された。
富山県~福井県	既報告を除き、漁獲記録はない。

※追加情報：1999年3月17日 七尾市庵町地先（富山湾富山県境付近沖）の大型定置網（岸端大敷）にて体重16kgのマスノスケが漁獲されました。

## 新・着任の場・所長の挨拶

### 着任のご挨拶

小川嘉彦

辞令を鞆に駅前からバスに乗る。間もなくバスは万代橋を渡る。右手の信濃川下流沿いに、停泊している佐渡汽船のフェリーが見える。左手上游の遙か向こうに、角田山から弥彦山を望むことができる。かつてずっと見慣れていた風景がそのまま溶け込むように目に映る。ああ、ここでは時間がなんとゆったり流れているのだろう…。それが着任する朝の最初の印象、と言うべくは肌で感じた実感でした。平成8年10月からの2年5ヶ月を中央水産研究所の水産研究官、企画調整部でお世話になり、日本海区水産研究所は二度目の勤務。山口県でお世話になっていた時から数えれば、三度目の日本海です。藤本前所長が病気で現職のまま亡くなるという悲しい出来事があつて、その後任としての思いがけない転勤でした。それから約一月、電話、ファックス、これはどうしましよう、あれはどうしましようと言った質問・注文・苦情等々の嵐の中での、毎日深夜に及んだ生活からは解放されましたが、内示を頂いた時の最初の戸惑いが消えた訳ではありません。

戸惑いの理由は幾つかありますが、最大のものは、やはり、自分にこんな大役が務まるだろうかと言う、素直な不安でした。水産庁の研究所だけではなく、国の試験研究機関の大半が、かつてない経験をしようとしています。それを嵐と表現する人もあります。仮に、それが「嵐」だとするなら、荒天準備は不可欠ですが、さりとてその場凌ぎの荒天準備だけでは間に合わないでしょう。荒天に耐えられるか否かは、これまで「船」をどう保守・整備し、或いは「乗組員」ひとりひとりがどう腕を磨いてきたか、また船全体としてどう訓練して経験と実績を重ねて来たかに大きくかかっています。地球環境問題をはじめ私たちを取り巻く厳しい状況の中で、水産業を守り、

育て、"国民の皆さんに安全な食料を安定して供給する"ために、科学の側面から貢献するという、定められた「船の針路」は保たなければなりません。その針路のために設計・造船され、また昨年秋に改良されたばかりの船なのですから。水産庁船団9隻の中の1隻として、乗組員と一緒に力を合わせ、船を嵐の向こうへ無事に航海させるにはどうしたら良いのか?また、同じ日本海という荒海を航く道府県の「船団」ともどう連携・協力しあいながら航海すべきなのか?

嵐の中でどんな場面或いは状況に遭遇するのかは予測できません。不幸なことに、人は予測できないことに対して、より一層大きな不安を感じるもので。だとすれば、恐れるべきものは嵐ではなくて、むしろ必要以上の不安なのかも知れません。「嵐」と言う捉え方そのものが、一面では、不安の象徴かも知れないので。そう考えると、大切なのは、困難な時にこそ私達に課せられた役割について、「共に希望を語ること」(ルイ・アラゴン)を忘れないことであるようにも思えて来ます。大きな嵐が来ると言うなら、その嵐を乗り切ってこそその船と船乗り。嵐を乗り越えて得るものも少なくない筈です。かつてホーン岬を回航した勇敢な帆船乗り達のように、船乗りとして一段と逞しく成長し、誇りと喜びに満ちて「大洋」に出たいもの…。三度目の日本海で、嵐の前の静けさに心の目を凝らしながら、今、そんな風に思っています。

しかし、「三度目の日本海」とは言っても、まるきりの新米「船長」に過ぎません。皆様のご指導とご鞭撻を心からお願い申し上げます。

(おがわ よしひこ 日水研所長)

### 新任のご挨拶

石岡春高

平成11年4月1日付で、青森県水産部参事、青森県水産増殖センター所長事務取扱を命ぜられ、就任をいたしました。

私は、今迄、漁政課、水産課(現・漁業管理課)、漁業振興課、八戸水産事務所、海区漁業調整委員会事務局、

水産部参事・栽培漁業公社派遣、その他外部等の行政業務に携わってまいりました。

このたびも、行政職としてではありますが、初めての試験研究機関に席を置くこととなり、青森県沿岸全域の水産増殖に関する試験研究を担当することになりました。

さて、我が国を取り巻く漁場環境は、国連海洋法条約に基づく新たな海洋秩序等の厳しさの中で、国民及び県民に対する水産物の安定供給を図るため、当水産増殖センターとしては、「21世紀の青森県漁業の発展に貢献できる研究」を目標に、本県の水産業界及び漁業者等のニーズにフィットするような研究成果とその定着化に向けて、所員一同と努めてまいりたいと考えております。

また、社会経済基盤の整備充実等に伴い、市町村間や都道府県間等地域間の有機的な結合により、広域化が図

られており、更に、水産業についても、県境のない海潮流を生産の場としての漁業振興においては、生産対象物に対する広域的な視点での調査研究が、一層重要となってくるものと考えております。

今後とも、効率化、体系化等に配意した試験研究を進めていきたいと考えておりますので、関係者各位の特段の御指導、御協力をお願いいたします。

(いしおか はるたか)

青森県水産増殖センター所長事務取扱)

### 着任のご挨拶

赤間 健太郎

平成11年4月1日付で秋田県水産振興センター所長に就任しました。県庁に採用されてからの7年間の試験研究業務以外は、本庁で水産行政事務を26年担当してきましたので、27年ぶりの試験研究機関への復帰となります。

さて、本県における「つくり育てる漁業」の始まりは昭和38年からのアワビの種苗放流と記憶しておりますが、それ以来、クルマエビ、ガザミ、マダイ、ヒラメ、ハタハタへと拡大するとともに、「資源管理型漁業」についても、昭和51年以降のハタハタ資源の急減を契機に取り組み、昭和61年度には主要な魚種の小型魚の保護と第1次の減船を行ったのに続いて、平成4年度からは第2次の減船とハタハタの3年間の全面禁漁という究極的な漁

業管理を行った結果、これらの魚種の多くは資源が回復基調にあるなど、概ね喜ばしい成果を挙げていると考えます。漁業を取り巻く諸情勢が依然として厳しい中、これを打開するためには、関係機関が相互に連携しあい積極的に取り組む必要があります。

秋田県水産振興センターでは、本年度から組織を企画管理部、海洋資源部、資源増殖部、内水面利用部の4部体制に改め、海面・内水面の漁場環境の保全や資源管理の推進などのための調査や試験研究を行い、本県漁業の発展に寄与していきたいと考えておりますので、前任者同様、皆様の御指導・御協力をお願い致します。

(あかも けんたろう 秋田県水産振興センター所長)

### 着任のご挨拶

伊藤 靖志

この度、4月の異動で今野場長の後任として場長に就任しました。内水面水産試験場からの転出で、水産試験場は5年前に1年間だけの在籍でした。

久しぶりで浜の空気を胸いっぱい吸っております。本県の漁業は、漁獲量は近年やや安定はしているものの、漁価は伸び悩み傾向にあり漁業経営は低迷しております。日本海沿岸の中でも、海岸線ばかりではなく、漁業経営体数、漁獲量とも最下位クラスであり、本県の漁業を取り巻く環境には厳しいものがありますが、暗い話題ばかりではありません。将来への明るい兆しも見えております、全体漁業就業者数の減少傾向のなかにあって若年齢層漁業就業者数の増加が見られることや、漁業資源の適切な管理と有効利用が従来にも増して重要になってきている昨今、近年の資源管理型漁業への取り組みによりまして、資源管理に対する漁業者の認識が深まってきていること

です。資源管理につきましてはいずれ所得の増大に結び付くものと思われます。

また、試験研究の動静を見ますと、共同研究で実施しております、イワガキの沖合海底養殖試験や超高層魚礁の増殖機能調査では効果の兆しが見えてきており、早晚、事業化に向けての施策を展開していくかもしれません。

よく言われることですが、21世紀は食糧危機と地球環境の危機が問題視されております。漁業を守り発展させていくことはこれらのテーマに関しても大いに関わってくることです。漁業を大きな視点で捉え、活力ある業界になれば幸いです。今後、業界と情報のキャッチボールをしながらさらなる発展を目指して、職員と力を合わせ、生産現場から頼られる試験場を念頭に邁進したいと思います。

皆様のご指導とご協力をお願い致します。

(いとう やすし 山形県水産試験場長)

**着任のご挨拶**

中村 弘二

この度、4月1日付で中央水産研究所加工流通部加工技術研究室から富山県水産試験場に転任してまいりました。

私の専門は生化学ですし、長らく食品部門の研究室におおりましたので、正直なところ、資源増養殖を生業とする場所に来て戸惑っています。異分野と言うことで、職員の足を引っ張らないよう頑張りたいと考えております。

こちらに赴任して来て、富山県水産試験場の職員の志気が高いことを喜んでおります。先日も、ある人から富山水試の雰囲気が明るいと言われて安堵しました。新立山丸の就航、仕事に熱心な若い人が多いためだと考えて

おります。

こうした雰囲気を壊さず、なおかつ、日常の業務に埋没したり富山湾の内側だけで仕事をしたりするのではなく、日本海全体を考えるような仕事、学会や対外的活動の積極的参加、新しい技術や分析手法の積極的導入など、外に打って出るような活力を引き出したいと考えています。日本海区水産研究所の皆様にも、ご迷惑をかけることがあるかもしれません、ご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

(なかむら こうじ 富山県水産試験場長)

**新任のご挨拶**

桑原 昭彦

平成11年4月1日付けをもって、篠田前所長の後任として、所長を命ぜられました。

近年の漁獲量や漁業者数の減少、バブル以降の税収の落ち込みによる研究予算の削減など水産試験場を取り巻く状況は年々厳しくなってきています。さらに、試験研究課題としても、TAC制度に伴う新しい資源研究や栽培漁業の見直しなど、簡単に解決できない課題が多くなっております、今後現場の漁業者の方々に満足していただける

ような研究成果を出していくためには、これまで以上の努力の必要性を感じております。

平成12年秋には、第20回全国豊かな海づくり大会が本府で開催されます。現在大会の成功を目指して準備を行っております。日本海区水産研究所、各県研究機関の皆様方のご来府をお待ちしておりますとともに、前任者同様のご指導、ご協力ををお願いいたします。

(くわはら あきひこ 京都府立海洋センター所長)

**着任のご挨拶**

安達 二朗

平成11年4月1日付で、6年ぶりに島根県水産試験場長として本場へ帰ってきました。水産試験場鹿島浅海分場での3年間と島根県栽培漁業センターでの2年間は、もっぱらマダイの放流効果調査を行い、それなりに結果を出したつもりです。その結果から、多分、私の考え方方が次の第4次栽培漁業基本方針に反映されるものと思っているところです。

もともと、水産試験場でアジ、サバ、イワシ類、スルメイカの資源研究を、30年近く行つていきましたので、水産試験場へ帰ってきても、栽培から資源への切換は、すぐにできると思います。そして、過去の資源調査の経験は、水産試験場の若い研究員の人たちに対して、いろいろなアドバイスができます。また、研究員の人達が忙し

い時には、彼らに代わって現場へ出るつもりです。

今年の1月22日、日韓新漁業協定が発効しました。島根県は、その影響を強く受けています。問題点は暫定水域内の資源管理措置です。これについては日韓漁業共同委員会と民間レベルの漁業者間の協議で決められるのですが、将来は研究者によって水域内の資源評価を行ない、それによって両国の漁獲の割当量が決められなくてはならないと思います。いずれにしても漁業政策は、漁獲拡大から資源の保存・管理へと転換が図られていますので、資源研究は、ますます重要な役割になると感じます。

関係者のご指導とご協力ををお願いします。

(あだち じろう 島根県水産試験場長)

## 着任のご挨拶

橋 宣 三

平成11年4月1日付けて、島根県栽培漁業センターの所長に命ぜられました。

漁業の取り巻く情勢が、資源の減少をはじめきわめて厳しい局面を迎えており、関係者のご期待に十分応えることができるかどうかまさに身が引き締まる気持ちでございます。

当センターは、昭和51年に開設されておりまして、当時まだ若かった私は、そこに働く職員の多くが同じ年ごろの人たちであったことから、自分もその一員となって共に活躍したいものだと、秘そかに望んだこともありました。その点今回の異動は、当時の夢が一応叶えられたとも言えそうです。

申し上げるまでもなくセンターの使命は、「健苗を量産すること」であり、評価も出来高を示す数字によって厳しく行われますが、これまで「量産」を主眼として取り組んできたなかで、近年は特に疾病によって、しばしば大きな打撃を受けている事例から、今後は、種苗量産現場での防疫対策を如何に適切に講じていくかが、将来につなぐ第一歩でないかと痛感しているこの頃です。

とにかくセンターが、栽培漁業を推進する中核施設としての役割を充分發揮するよう職員が一丸となって、最善の努力をしていく所存でございますので、皆様のご指導とご協力をよろしくお願ひします。

(たちばな せんぞう 島根県栽培漁業センター所長)

## 日水研職員の退職・着任・転任の挨拶

### 退職のご挨拶

廣 橋 昇 保

桜のつぼみがふくらみ、やがて新潟にも爛漫の春が訪れ、この一部始終を心置きなく実感できたのは何十年振りのことだろう。昭和32年乗船して以来、心の中でこのような情緒は切り捨てて仕分け整理をしてきたのに。こんな贅沢な時間が許されていいのだろうか!誰も何も文句は言わない、そうだ私は定年だったんだ。定年とはこんなにも自由で全く別な世界を体験出来るのだと、心の中から猛然とあれもしよう、これもしようと色々な思いが沸き上がります。退職下船して間もなく一ヶ月が過ぎんとしています。

昭和43年入庁このかた、どれほど多くの方々とのそれぞれの接点でご迷惑をかけ且つお世話になったことか、心から有難うございましたとお礼を申し上げます。来し方はすでに遙か霧の彼方に消えつつあります、ラストストレッチは並み足に落としてのんびりとゆきます。裏の松林の風の音を聞く時に思わず「みづほ丸」の安航を祈らずに居られません、良き調査航海が出来ますよう、そして皆様方のご活躍とご健勝を心から祈っております。

(ひろはし のりやす 前日水研みづほ丸船長)

### 着任のご挨拶

坂 井 友 信

清水を出たときは桜が満開で春の陽気に溢っていましたが、新潟に着任し数日後の帰宅途中、突然の雹に降られ長年住み慣れた土地ではありますが、土地による季節の違いを改めて実感いたしました。

今までの清水での通勤時間片道1分の生活から片道1時間30分に変わり、身体が生活の急変に追いつかない状

況ではありますが、日毎に春の様相が増してゆく新潟の春を楽しませて頂いております。

以前長年過ごした職場ではありますが、心機一転初心にもどり、精一杯努力してゆきたいと思いますので、ご指導方よろしくお願ひいたします。

(さかい とものぶ 日水研庶務課用度係長)

**中尾律雄**

高知城の桜に見送られ、4年ぶりにみずほ丸に戻って参りました。信濃川に着岸しているみずほ丸に新鮮さを、ふだん何気なく通りすぎた万代橋に懐かしさを感じて驚いております。4月12日より11年度第一次航海、まつましたとばかりに低気圧の挨拶、暴風・波浪警報、緊張の連続の航海、4月30日に調査を終え新潟港に帰港、ベ

テラン乗組員のアドバイスや若手乗組員の元気のよさは頼もしいかぎりでした。冬の厳しい日本海相手の調査をする日が続くと思いますが、日本海の厳しさを熟知し基礎情報の収集に少しでもお役に立てればと思っております。今後ともご指導・ご支援の程お願い申しあげます。

(なかお りつお 日水研みずほ丸船長)

**本間和海**

この度、4月1日付けで白萩丸より、みずほ丸二等航海士に着任しました本間です。

調査船には、5年前まで乗船していた探海丸以来で、その頃に比べて、調査機器・調査内容も多分の違いもありますが、早く日水研・みずほ丸に慣れて一人前働く様、頑張るつもりです。

新潟へは、白萩丸に乗船中に一度、寄港したことがありますが全くの『新潟素人』で、右も、左もわからないんですけど、皆さんに新潟の良いところ、楽しいところを色々教えて頂いて、楽しみたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

(ほんま かずみ 日水研みずほ丸二等航海士)

**鈴木和幸**

この度、みずほ丸通信長として、乗船することとなりました。自分は調査船の経験が、こちらに来る前、一年間照洋丸に乗船していただけですし、東京の船にしか乗ったことがありませんので、調査の事は、ほとんど素人で、又、地方での暮らしあなたことが無いのですべて新鮮な感じがします。2~3年前、航海中の補給で新潟に真夏と真冬、一度ずつ入港したことがあります。夏はとても暑く、冬は町中にはそれほど雪はありませんでした。

しかし、今年4月に東京から新潟に向かっている途中で、「トンネルを越えると雪国だった。」という詩があつたと思いますが、その通りでした。冬になって雪の生活は大変だと思いますが、新潟で美味しい米を食べて頑張って、みずほ丸そして水研の方々と楽しくやっていきたいと思いますので、ご指導ご協力をよろしくお願い致します。

(すずき かずゆき 日水研みずほ丸通信長)

**井本勇**

平成11年4月1日付けで、北海道区水産研究所「北光丸」から、日本海区水産研究所「みずほ丸」へ着任しました。

日本海での調査・トロール調査は全く初めてで、皆様

に苦労をかけると思いますが、少しずつ勉強をしていき一日でも早く慣れるように努力しますので、ご指導の方をよろしくお願ひします。

(いもと いさむ 日水研みずほ丸甲板員)

**藤原崇**

4月に、みずほ丸甲板員に配属された藤原です。  
去年の4月に水産庁に入りました。1年間は、船舶予備員をやってきました。新潟には、初めてきました。

何もわからないので、色々、教えて下さい。  
宜しく、お願ひします。

(ふじわら そう 日水研みずほ丸甲板員)

## 坪倉達明

平成11年1月1日より、科学技術特別研究員として、海区水産業研究部資源培養研究室に席を置かせていただくことになりました。12年間北海道で過ごし、大学では津軽海峡を眼前にして研究を続けてまいりましたが、生まれは山陰の海のすぐ近くで、日本海に親しんで育ちましたので、今はまだ、研究対象としてよりも、懐かしさが先に立った思いで研究所の裏の海を眺めているところです。

当研究所に派遣前は、北海道大学水産学部水産増殖学科鹹水増殖学講座に在籍しておりまして、砂浜の潮上帯に生息するヨコエビの一種、ヒゲナガハマトビムシを対象として、小型甲殻類の潮上帯進出へのプロセスと適応機構を研究してきました。その研究テーマ故に、調査可能な時間が、潮間帯の生物を扱う場合のように潮汐周期に規定されない、舟も必要無いので一人でも調査可能、漁協との折衝問題なども無いといった、やりやすい点がある一方、市街に近い砂浜潮上帯が調査地であるが故の

問題も多く、昆布干しの整地に伴なうブルドーザーの介入、ビーチバレー大会による搅乱、浜掃除を生きがいとする老人との宿命の対決など、色々悩まされたこともありました。が、何とか博士課程を終えることができました。

今後は、日本海浅海砂浜漁場の底生小型甲殻類の動態を明らかにし、底魚増殖事業の一助になるような研究ができるように努力したいと思います。先に申し上げましたように、これまで水産学部に在籍しておりながら、目は陸上方向を向いており、船にも長い間乗っておりませんでしたので、しばしば皆様を唖然とさせることもしてしまったかもしれませんが、水産業に少しでも貢献できるように、どのように研究すべきか自分なりに常に考えつつ仕事をしていきたいと思います。宜しくお願ひいたします。

(つぼくら たつあき 科学技術特別研究員)

## 転任のご挨拶

## 平川和正

このたび、4月1日付けをもって、養殖研究所飼育環境技術部長として異動することになり、日本水研海洋環境部生物環境研究室（現生物生産研究室）での研究業務に終止符を打つことになりました。

平成元年4月選考採用により当研究室に配属されてから丁度10年の歳月が過ぎ去ってしまいました。炎天下、富山湾での深層水海域肥沃化実験（平成元年～2年）を皮切りに、厳冬期、ナホトカ号重油流出事故に伴う沖合域生態系影響調査（平成9～10年）に至るまで息つく暇もなく、日本海のプランクトンとつき合ってくることができました。その間、世間をアッと驚かせるような画期

的な研究成果を発表するまでには力が及ばなかったものの、その下地となる幾つかの論文を執筆することができ、また、それらを他の研究者の引用文献の中に見つけたとき胸をなで下ろしたものです。研究者の一人として最低限度の役割は果たしてきたつもりです。これも私自身の力だけでなく、皆様のご支援・ご協力があってこそと信じております。本当に、ありがとうございました。

おわりに、在勤中皆様から賜りましたご厚情に対して再度厚くお礼申し上げるとともに、皆様のご健勝と平穏な日本海が永久に続くことをお祈り致します。

(ひらかわ かずまさ 養殖研究所飼育環境技術部長)

## 西田宏

1月1日付で中央水産研究所へ異動しました。平成元年に日本水研に配属されて以来、約10年間、日本海ブロック各府県機関の漁況担当者の皆様、いくつかの漁協や漁業関係の皆様にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。マイワシ・マアジ・マサバの生鮮標本やデータの収集にご協力をいただいたほか、多くのこ

とを学ばせていただいたのに、十分なお返しができなかつたことが本当に心残りですが、今後の新しいフィールドでの研究になんとか活かしていきたいと思います。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

(にしだ ひろし

中央水産研究所生物生態部資源管理研究室)

## 鈴木昭博

日水研の皆様、みずほ丸の皆様、在任中は、格別のご厚情を賜り深く感謝しております。お陰様で兵庫の生活にも慣れ持ち前の明るさで頑張っております。

私は4月4日(日)に住み慣れた新潟を離れ兵庫に向かいました。トラックを見送った後、新潟に別れを告げる前に柏崎にあるソルト・スパ潮風に立ち寄りました。日本海に沈む夕日を眺めつつ新潟での3年間の思い出を思い起こしながら温泉に入りました。

温泉に入りながら見た日本海に沈む夕日は格別なものでした。平成8年4月3日に新潟に赴任した時は大雪に出迎えられて大変でしたが、これから出発しようとしている時に、あまりにも夕日が綺麗でしたので、新潟を離れることが名残おしく感じ複雑な心境でした。

勤務地である神戸までは電車とバスを乗り継いで1時間弱かかります。交通の便は良いのですが、時間的には新潟の頃と、あまり変わりありません。

瀬戸内海漁業調整事務所、取締船白鷺97トンは4月14日(水)に神戸を出港し、今年度の第一次航海が始まりました。本船の乗り心地は、飛行機が大気の不安定な場所を飛んでいる時のような小刻みな揺れがあり、音はプロペラエンジン飛行機のような音で、巡航速度は18Ktです。船に乗っていると言うよりも小型水上飛行機で海の上を走っているような錯覚をおこします。

本船は家庭用の冷蔵庫しかないため食料の保管が出来

ず、朝出港して、夕方には入港する航海を続けております。また、水が6トン程度しか積めないため3日～4日に一度は、どこかの港で給水しています。水が自由に使えないため風呂は使用できず毎日、銭湯に行っています。

広島の大野に入港した時は、瀬戸内海区水産研究所のしらふじ丸の懐かしいメンバーと久し振りに再会することが出来ました。

6月と7月には、本船では初めての日本海に行きます。

各月20日間の日程で韓国漁船の取締りのため浜田・境港方面へ行きます。本船にとっては大航海となりそうです。幸いに日本海側は知った港も多く、安心して入港出来ます。

当地に何年いるか分かりませんが、明石海峡大橋や、しまなみ海道(尾道～今治間)の開通で四国とのアクセスも容易になり温泉旅行好きの私にとってはドライビングポイントが広がり航海の合間の休暇が楽しみです。

こちらにお出かけの節は是非共お立ち寄り下さいますようお待ち致しております。またお目にかかる日を心より楽しみにしております。

まずは書中をもちまして御礼かたがた転勤のご挨拶を申し上げます。

(すずき あきひろ

瀬戸内海漁業調整事務所白鷺通信長)

## 藤本 實 前日水研所長を偲んで

### 藤本所長の経歴とその業績

小川 嘉彦



平成9年以降日本海区水産研究所長を務めておられた藤本實所長が、働き盛りの59歳という若さで現職のまま亡くなりました。越後にも間もなく春が訪れようとしていた、2月14日午前0時49分のことです。日本海における水産研究の推進にあたり指導的役割を果たしておられた藤本所長を突然失ったことは、日本海区水産研究所はもとより、水産庁研究所にとっても大きな痛手であるばかりでなく、日本の水産研究と水産業界にとっても大きな損失だったと言っても決して過言ではないでしょう。ここに改めて、謹んで哀悼の意を捧げる意味で、今は亡き藤本所長の業績を偲んでみたいと思います。

藤本所長は昭和38年4月、東京水産大学を卒業されると同時に、当時の農林省東海区水産研究所海洋部（現在の中央水産研究所海洋生産部）に奉職され、約37年間、南西海区水産研究所海洋第一研究室長、海洋動態研究室長、黒潮調査研究官、西海区水産研究所海洋環境部長、同企画連絡室長、日本海区水産研究所企画連絡室長および南西海区水産研究所長を歴任され、水産海洋に関する調査研究と水産研究所における研究の管理運営の業務に専念してこられました。

大学時代、故宇田道隆教授の下で水産海洋学を学ばれた藤本所長は、東海区水産研究所海洋部においては、始まったばかりの黒潮国際共同調査のなかで、多数船と航空機を併用した海洋実験調査法を我が国で初めて実用化され、我が国の海洋調査研究法が国際的に高い評価を得る礎を築かれました。当時の藤本所長は、ようやく成長し始めた水産海洋学会の、まさに文字通りの意味での“若きプリンス”でした。

南西海区水産研究所海洋第一研究室長に昇任された昭和57年からは、漁況海況予測における黒潮の役割の重要

性に着目し、黒潮流軸の変動、黒潮大蛇行の発生、持続および消滅の経験則をもとに、南西黒潮流域における海況の総合予測法を開発され、漁業者ならびに利用加工業界など海況予測利用者に大きな希望を与えられました。また、藤本所長が、水産海洋研究に極めて重要な海洋観測用の新測器の開発と導入・改良ばかりでなく、海洋計測におけるコンピューター化の推進にも主導的な役割を果たされ、水産研究所はもとより都道府県水産試験場と業界における海洋計測の知識と技術の普及・指導に多大の貢献をしてこられたことは、関係者ならば誰もが知るところです。

平成元年には西海区水産研究所海洋環境部長に昇任され、これまでの研究で培った豊富な知識と豊かな経験を十分に活かして、赤潮被害防止のための有明海のシミュレーションモデル作りや雲仙普賢岳の噴火に伴う海域汚染調査の総括責任者として、指導的な役割を果たされました。

その後、平成3年4月からは西海区水産研究所企画連絡室長を、平成5年4月からは日本海区水産研究所企画連絡室長を歴任され、平成7年にはこれまでの功績を高く評価され、南西海区水産研究所長に昇任されました。そして、卓抜な指導調整力をもって南西海区水産研究所の組織改編を推進し、水産研究所の主導者としての重責を果たされました。平成9年には、企画連絡室長時代の2年間を過ごされた日本海区水産研究所の所長となられ、ナホトカ号油流出事故現地連絡協議会の本部長としても、日本海における流出油が水産資源および生態系に及ぼす影響に関する調査研究を陣頭指揮して、この難局を見事に乗り切られたのでした。

こうして水産研究へのたゆみのない努力と研究運営への熱い情熱をもって、研究と研究所の発展に力を尽くしてこられた先導者としての藤本所長が、志半ばにして病に倒れ、帰らぬ人となられたことは、関係者だけに留まらず、藤本所長を知る人々には痛恨の極みであり、惜しんでも余りあるものがあります。しかし、藤本所長が残された大きな業績と水産研究に対する情熱と志は、末長く引き継がれるでしょう。また、身をもってその実現に努力していくことが、残された私達に課せられた大切な務めではないでしょうか。

私事になりますが、最後に藤本所長にお目にかかったのは平成10年の暮れ、東京で開かれた国立試験研究機関長協議会の折でした。お顔の色はやや青白く感じられましたがお元気そうで、おい、偶には新潟にも顔を見せろよ、と笑顔で仰って下さいました。お通夜の時にお目にかかった奥様にそのことをお話をしたら、もうその頃には

随分と辛い状態で、相当無理をしておられたのだそうです。不治の病と闘いながら、職責を果たそうと最期まで頑張り抜いて逝った藤本所長には、尊敬の念を遙かに越えた感情を搔き立てられます。

(おがわ よしひこ 日水研所長)

### 黄泉の国へ行かれた藤本さんを悼む

友 定 彰

平均寿命80才といわれる今日、現職で逝去の報を聞き、まさに青天の霹靂であった。

思えば、昭和45年に東海区水産研究所に奉職したとき、海洋第一研究室長に平野先生を擁し、その下に上原さん、松本さん、藤本さんが充実した研究生活をしていられた。丁度、科学技術庁予算のCSK(国際黒潮共同調査)が終わったときで、藤本さんはCSK調査のとりまとめをしていられた。

CSK調査では、平野先生との共同で、黒潮に染料を投入してその拡散状況を観察し、黒潮が卵・仔稚魚の輸送拡散に果たす役割を調査研究して、多くの成果を出されていた。

CSK調査の後に、昭和45年から3年計画で科学技術庁の促進費で「北方亜寒帯海域に関する総合研究」が始まった。藤本さんは前述のCSK調査のとりまとめがあるので、入庁直後の私がこの調査の担当となった。しか

し、北方亜寒帯海域の何を調査してよいのか皆目見当もつかず、研究室内で大いに話し合って、混合水域に黒潮から切離して形成される暖水塊を調査することになった。このときから調査のたびに調査船蒼鷹丸と一緒に乗船するようになり、調査の楽しさ、厳しさ、調査結果のとりまとめ、など仕事の面でも大いに教えられた。その後も、冬の東シナ海で係留系を入れて、当時、藤本さんが苦労して使えるようにしたSTD(CTDではない)を蒼鷹丸から降下させて連続観測を行った。その時の、時化はすさまじいもので、乗組員の中でも、「これは冬の北洋みたいだ」という声が出ていた。研究所での生活、日野コンテッサのこと、熱帶魚飼育のこと、など色々と思ひ出す。

東海区水産研究所で若かった時代に、苦労を共にした藤本さんの逝去は、残念でならない。

(ともさだ あきら 中央水研海洋生産部長)

### 藤本さんを偲んで

坂 本 久 雄

私が藤本さんに最初に出会ったのは、昭和43年3月東海水研に出張したときです。当時の南西水研海洋研究室川合英夫室長に、「藤本さんは前途有望な若者である、懇意にしてもらうように」と言って紹介してもらった。それから、14.5年経過した昭和57年9月に南西水研高知府舎の海洋動態研究室長として赴任され、6.5年間一緒に仕事をした。早起きは苦手であったようだが、夜は毎日残業をしておられた。当時のワープロ辞書には専門用語が登録されていなかったので、海洋辞典の専門用語を面倒な手順を経て登録し、我々に提供してくれた。また、各県水試が観測した海洋観測資料を有効に活用しなければならないと、昼間は研究室の研究業務をされ、夜の時

間を使って、臨時職員の協力を得ながら3年ほどかけて膨大なデータ入力をされ、漁場海況概報の省力化、海況予測の精度向上に努められた。藤本さんの業績は多々あり土佐湾、豊後水道の海況の類型化、黒潮変動と分枝流の動向など、基本的データは現在も活用されておりその功績は大なるものです。

定年退職を目前に控え、その折りには是非都合をつけてお別れに伺う予定で居たのに、それも叶わずこのようになることになり、悔しくなりません。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(さかもと ひさお 中央水研黒潮調査研究官)

## 西海区水産研究所時代の藤本實所長

渡辺 康憲

藤本さんが海洋環境部長だった頃、私は水産庁に採用となり、海洋環境部漁場保全研究室に赴任した。お顔が大きくて、笑顔の細い目が、とても人なつっこい感じのする方だった。藤本さんの西海区水産研究所勤務4年間の内、3年間その下でお世話になったことになる。当時藤本さんは、水研で一番若い部長さんだったと思う。

部長室と、漁場保全研とは、同じ区画の中にあって、仕切がなかった。極秘の話も、くつろいだ話も、筒抜けだった。藤本さんは、右も左もわからぬ私に、水研のイロハを、さりげなく教えて下さった。様々な思い出が、心に浮かぶ・・・。御自身管理職になったものの、研究への未練が心の底にくすぶっていたのだろう、5時を過ぎると、4階電算機室のヒューレット・パッカードに黒潮の流路を描かせては、よく「作品」を見せて下さった。時には、クラリネットの音色が聞こえてきたこともある。赤潮の会議で柳川に御一緒した時は、「高知じや黒潮ばかりやってたのに、今度は赤潮だぜ！」と、しゃれを一発。「大好きだぜ、高知！」と「これでも若い頃は運動神経、良かったんだぜ。」が口癖だった。

そして、ソフトボール大会では、往年の勇姿を彷彿とさせる大飛球をカッ飛ばされた。私が書いたプロジェクト研究応募資料のポンチ絵には、遊び心がないと、たちまちユーモラスな絵に仕上げていただいた。一太郎の辞書に夥しい数の単語が登録されていて、驚いたこともある。達筆で、太字の万年筆で、見事な文章を書かれる方だった。思い出は尽きない・・・。

重責を背負いつつ、余裕をもって仕事を楽しみ、科学としての水産・海洋研究に大きなロマンを感じておられた方だったと思う。管理職としての仕事ぶりは、いかにもベテランらしく安定していて、いつも淡々としたものだった。私は当時、その能力の凄さを理解できていなかつた。やがて、企画連絡室長になられ、西海区水産研究所の規程集を集成し、整備された。当時を思うと大変な作業だった筈である。時代に応じて規則は変わるからと、差し替え可能な紐綴じ方式を採用された。都会的で、いつも、柔軟な思考をされる方だった。

合掌。

(わたなべ やすのり 西水研海区産業研究室長)

## 『二十二年前の卓球』(藤本所長の思い出)

坂上 純郎

私と藤本所長とは三度職場をともにしました。藤本さん（と呼ばせていただきます。）が研究員の頃（東海水研），企画連絡室長の頃（日水研），そして所長で日水研に帰られて亡くなられるまでの通算約七年間です。

思い出深いのは、今から約二十二年前、私にとって最初の転勤先である東海水研に異動して間も無い頃のことです。私は同僚に誘われるままに野球部に入部しましたが、レベルが高く、懇親会のみ参加する部員でした。当時の野球部のメンバーは総務部を中心でしたが、伝統ある水研野球部の第一人者でスポーツ万能の藤本さんは別格で、皆から尊敬されて慕われる存在でした。

その藤本さんに卓球の試合で一度だけ勝ったことがあります。廃屋寸前の平屋建ての倉庫の片隅に設けられた卓球場で二人だけで試合をする機会があり、時間が過ぎるのも忘れ夢中でラケットを振っていました。いつも目を細めながら笑顔を絶やさない藤本さんから笑顔が消えて、真剣な表情で「もう一度やろう」と言われたことが昨日のように思い出されます。そのとき一勝した嬉しさは、その後の仕事に立ち向かう自信になりました。  
ありがとうございました。（合掌）

(さかうえ すみお 日水研庶務課長補佐)

## 藤本 實 前日水研所長のこと

養 松 郁 子

平成5年4月に藤本前所長が企画連絡室長として日水研に赴任されてからというもの、当時入省2年目のわたしにとって、それまで近づきにくい存在だった企画連絡室が、ずいぶん親しみやすいものになりました。

企画連絡室長と入省したてのヒラの研究員では、具体的な研究の中身の話をするということはほとんどありませんでしたが、時々企画連絡室を覗いては、原稿の書き方などで意見をいただいたりしました。とくに、文献の収集とその整理にはかなりこだわっておられ、ご自分で作られた文献のデータベースを見せていただいたこともあります。大事にされているそのファイルには、娘さんのお名前がつけてありました。

昼休みは、食事を兼ねて水研の近くをよく散歩していました。夕方は運動に汗を流され、サッカーの練習中に右足のアキレス腱を切られたときは、車が運転できず通勤に不便されました。「今度切るとしたら左足だから、次の車はオートマにするよ。それなら右足だけで運転できるからね。」そうおっしゃって、広島へ転勤される少し前に買われた車は、確かにATだったので、思わず笑ってしまいました。

運動をいろいろされているわりに、「最近、空気を食べても太るような気がするんだよね。お昼なんてそばしか食べてないんだけどね。」そうおっしゃる一方で、空港通りの焼肉屋は、ひととおり試してみられたようでした。

藤本前所長が広島へ転勤された後、わたしが出張で南

西水研に行った折に所長室を尋ねると、快く迎えてくださいました。その頃もまだまだお元気で、「つい最近、高知庁舎まで車で行ってきたんだよ。」と言われ、日水研の最近の様子などいろいろ尋ねられました。広島に行かれても、新潟の面々をお気遣いいただいていることを実感しました。

病気で入院されたという知らせを聞いて以来、所長として再び日水研に赴任されるまでしばらくお会いすることもなく、また、入れ違いでわたしが長期の休暇に入ったために、ゆっくりお話する機会を持たぬまま、しばらく過ぎてしまいました。昨年の秋の入院から戻られた折、ようやく少したわいもない世間話をしました。その合間に、「今回の入院ではとりあえず急場をしのいだだけだからね……」という言葉が漏れ、「えっ！」と思った瞬間すぐに話題を替えられました。しかし、その数ヶ月後に突然の訃報に接しようとは、思いも寄らぬことでした。

思い出というには、まだ生々しく、あえて標記の様な題にしました。この原稿を書くためにいろいろと思い返している間にも、ふと企画連絡室長当時の元気な姿で、「養松さん、またカニのことで問い合わせが来ているんだけど、ちょっと教えてくれない？」と気さくに研究室に入って来られるような気がしてなりません。ですから不遜ながら、ご冥福を……とはあえていいません。またいつかどこかでお会いできますよね。きっと。

(ようしょう いくこ 日水研日本海漁業資源部)

## 《会議レポート》

### 平成10年度日本海ブロック水産業関係試験研究推進会議 資源管理部会

日 時：平成11年1月19日

場 所：日本水研会議室

参考機関：13 参加人員：22

各県水試・センター資源研究部門の責任者が参考し、平成10年10月1日に行われた日本水研の組織改編を受けて実態に即するための本部会の名称及び運営細目の修正の提案、我が国周辺資源調査・TAC対応業務の諸問題、資源管理実践研修及びズワイガニ研究協議会、マダラ研究会等10年度開催作業部会の経過について報告と討議が行われた。本部会の名称を「漁業資源研究部会」とすること及び新たな運営細目が了承された。また、全国場長会より要望があり水産庁が実施を約束した、海区水研による「資源管理実践研修」については、内容等を吟味して実施することで合意された。さらに、11年度に開催予定の諸会議の日程等についての報告もなされた。

### 日本海漁海況予報等検討会議

日 時：平成11年1月20日

場 所：新潟郵便貯金会館（メルパルク新潟）

参考機関：25 参加人員：58

1998年の漁海況の経過と特徴を整理し、漁況海予報の実施計画や新漁業管理制度推進情報提供事業の問題点などについて協議した。

さらに、今後の漁海況予測手法の高度化に向けて事例と報告と問題点の検討を行った。

### 平成10年度日本海ブロック水産業関係試験研究推進会議 海洋環境部会

日 時：平成11年1月21日

場 所：新潟郵便貯金会館（メルパルク新潟）

参考機関：19 参加人員：35

日本海における水産海洋研究を推進するために、平成9年度から開始した「新漁海況事業」の問題点について検討した。1998年の日本海における異常低塩分水現象と海洋生物の特異現象について情報交換を行った。さらに、主に日本水研から調査研究に関わる情報の提供を行った。

### 平成10年度地域先端技術共同研究開発事業日本海ブロック報告会

日 時：平成11年2月2日

場 所：日本水研会議室

参考機関：15 参加人員：20

標記事業参考機関（兵庫、山口、神奈川、熊本、石川、北海道）から報告と討議が行われた後、他の参加県からこれに関する報告が行われた。また、来年度の研究計画について討議された。講演は、中央水産研究所生物機能部山下倫明主任研究官から「魚類遺伝子導入技術とトランスジェニックフィッシュを用いる遺伝機能の解析」という題名で行われた。

### 平成10年度日本海ブロック水産業関係試験研究推進会議 資源増殖部会

日 時：平成11年2月3日

場 所：新潟会館

参考機関：22 参加人員：43

日本水研の新組織と研究基本計画についての説明がなされた後、アユ冷水病、科学技術政策、水産基本政策検討会、APECにおける水産物自由化問題、国の環境ホルモン関係試験研究、新技術地域実用化研究促進費等の最近の水産業や水産研究をめぐる情勢と油流出事故、アコヤガイ大量斃死モニタリング、ヒラメ増殖関係諸問題、イワガキ増養殖研究会、マダラ研究協議会等、ブロックとして取り組んだ事項について報告・討議が行われた。また、各府県水試等から、情勢報告と日本水研への要望、環境ホルモン関係の試験研究等について報告が行われた。ブロック推進会議の要望として、有用海藻関係の研究会の設立希望が多く見られた。また、ブロックの研究者の担当・専門別リストを作成したこと、さらに、栽培漁業技術開発推進事業日本海ブロックの報告として「魚病に関する申し合わせ」についてブロックとして合意されたことが報告された。その他、部会の実施要領の改正と開催日程を2月の第1週頃とすることが了承された。

### 日本海ブロック増養殖研究推進連絡会議

日 時：平成11年2月3～4日

場 所：新潟会館

参考機関：26 参加人員：58

水産庁井上研究管理官から、疾病関係についての情勢報告、鳥取水試山本栄一氏から、「ヒラメ増殖についての諸問題についての科学的見解」、日本水研黒田一紀氏から、「日本海に広がった低塩分水について」の話題提供と討論が行われた。日本水研から、行政特研として、当水研もヒラメの資源問題についてもプロジェクト化への対応中である旨、報告された。研究発表課題数は15課題で、

このうち、藻類関係が7課題とこれに関する青森県からの補足発言、種苗生産関係が4課題、種苗放流関係が4課題であった。1日目終了後に懇親会が開かれ、2日目終了後には海藻関係の研究者間の打ち合わせが行われた。

#### 平成10年度日本海ブロック水産業関係試験研究推進会議

日 時：平成11年2月18日  
場 所：新潟郵便貯金会館（メルパルク新潟）  
参集機関：19 参加人員：27

構成機関である日本水研及び日本海ブロック12府県の試験研究機関の担当者、水産庁資源生産推進部研究指導課長、課長補佐ならびに日裁協の担当者が参加して開催された。

会議では、ブロック機関の平成10年度の活動状況、研究成果ならびに平成11年度の事業・研究計画等についての報告を基に協議した。また、研究指導課長から水研の独法化についての概要の説明が行われた。さらに、日本水研より水産庁研究所の組織改正及び新研究基本計画についての説明がなされ、担当部長による今後の研究推進についての話題提供を受け、討議を行った。討議の結果、研究の到達目標を明確にし、課題の取り組み、具体的な研究戦略の組立が必要であることが確認され、ブロック府県機関の協力・連携が要請された。

#### 「ナホトカ号」油流出事故に係る第4回現地連絡協議会

日 時：平成11年2月19日  
場 所：新潟郵便貯金会館（メルパルク新潟）  
参集機関：11 参加人員：24

関係府県及び日本水研から平成10年度の調査結果の報告が行われ、事務局より現地連絡協議会としての最終報告書の作成、とりまとめ及び時期等が提案され、了承された。また、この報告書の発行をもって、この協議会としての活動を休止することが了承された。

今後の関連調査について、日本水研、石川県は独自の課題として、他の各府県は通常業務の中で継続することが報告された。

#### 平成10年度調査船等実務担当者会議

日 時：平成11年2月25日  
場 所：新潟会館  
参集機関：26 参加人員：67  
日本海ブロック試験研究機関、水産関係高等学校及び北海道の試験研究機関に所属する調査船の担当者が参集し、調査船に搭載しているCTDのメーカー（販売会社）の担当者に出席を求め、CTDに関する情報交換を行った。また、代船となった平安丸（京都府）、福井丸（福井県）、立山丸（富山県）の紹介があった。

#### 平成10年度対馬暖流系スルメイカ資源評価会議

日 時：平成11年3月4日  
場 所：かでる2.7（道民活動センター）札幌市  
参集機関：38 参加人員：72

「我が国周辺漁業資源調査」の一環として、日本海ブロック資源評価会議の内、対馬暖流系スルメイカの評価会議を、太平洋系（北水研主催）との共催で実施した。平成11年度からスルメイカ資源評価票は当該年の漁場一斉調査の結果も取り込むこととしたため、ブロック資源評価会議は11年7月に開催する予定である。故に本会議では、全国評価票に使われない日本水研作成の10年度評価票（案）の提示は行わず、現時点で判明している10年度の資源状態や新たに採用する評価手法等についての説明を行い、活発な論議を実施した。また、次回提示の評価案作成のための情報交換を行った。

#### 「流出油が沿岸・沖合生態系に及ぼす中・長期的影響の解明に関する研究」推進評価会議

日 時：平成11年3月12日  
場 所：日本水研会議室  
参集機関：6 参加人員：10

水産庁資源生産推進部研究指導課、日本水研、中央水研及び九州大学農学部の研究担当者、技会連調課担当官並びに学識経験者として神戸女学院大学人間科学部 山本義和教授の出席の下で、環境庁国立機関公害防止等試験研究費による標記プロジェクト研究（平成10年～12年度）の初年度の成果について報告し、今後の計画に検討を加えた。

## 《刊行物ニュース》

「ナホトカ号」重油流出事故に係る水産資源及び生態系影響調査最終報告書 平成11年2月  
重油による海洋汚染の日本海沖合域の生態系への影響の把握と評価成果報告書 平成11年3月

日本海ブロック試験研究集録 第39号  
日本海区底魚資源研究連絡会議報告(平成8年度) 平成11年3月  
日本海区水産研究所研究報告 第49号 平成11年3月

## 《所内談話会》

平成11年3月19日 技術は移転するか 竹内 昌昭(東北大学)  
平成11年3月29日 日本海における1980年代以降の漁海況変動(水産海洋シンポジウム) 平井 光行  
オオトゲハマアミの飼育下における脱皮と成長・成熟(日本水産学会他) 首藤 宏幸  
平成11年3月30日 表層トロール網を用いた加入前スルメイカの採集(Ⅱ)

-採集個体の大きさと発生時期-(日本水産学会発表)  
木所英昭・長谷川誠三(日本水研)・西田宏(中央水研)・熊沢泰生(ニチモウ)  
ヒラメの核DNAインtron領域の変異性(日本水産学会発表) 藤井 徹生  
日本海周辺海域における1980年代末以降の資源と加入の動向 3. 対馬暖流域(スルメイカ他)(水産海洋シンポジウム) 長谷川誠三

## 《人事異動》

### 青森県

3月31日付

天野 長蔵 退職(水産試験場東奥丸通信長)  
原田陸奥男 退職(水産試験場青鵬丸通信士)  
青山 穎夫 退職(水産増殖センター所長)  
山本富士夫 退職(水産増殖センターワン次長 総務室長事務取扱)

4月1日付

敦澤 義一 水産試験場次長(海区漁業調整委員会事務局長)  
小笠原敏男 水産試験場総務室長(漁業管理課長補佐)  
中田 凱久 水産試験場漁場環境部長(むつ水産事務所普及課長)  
葛西 康二 水産試験場総務室総括主査(五所川原出納事務所総括主査)  
中村 義美 水産試験場開運丸機関員(同青鵬丸機関員)  
成田 義夫 水産試験場東奥丸一等機関士(同開運丸一等機関士)  
山田 光将 水産試験場東奥丸甲板員(漁業管理課はやぶさ甲板員)  
伊藤 和弘 水産試験場東奥丸機関員(同青鵬丸機関員)  
佐藤 正樹 水産試験場青鵬丸二等機関士(同東奥丸二等機関士)  
村井 裕一 海洋学院学院長(水産試験場次長)

東 功 東青地方漁港事務所次長(水産試験場総務室長)  
仲村 俊毅 水産増殖センター総括研究管理員海草部長事務取扱(水産試験場総括研究管理員漁場環境部長事務取扱)  
吉田 英喜 西北地方漁港事務所総括主査庶務係長事務取扱(水産試験場総務室総括主査)  
大川 光則 漁業管理課主査(水産試験場漁場環境部主任研究員)  
木村 分 弘前土木事務所主査(水産試験場総務室主事)  
小平 泰史 漁業管理課はやぶさ甲板員(水産試験場開運丸機関員)  
今村 豊 水産試験場漁場環境部技師(新規採用)  
金谷 富明 水産試験場開運丸(新規採用)  
高屋敷一成 水産試験場開運丸(新規採用)  
小又 総 水産試験場開運丸(新規採用)  
畠川 敏明 水産試験場東奥丸通信士(新規採用)  
松村 浩 水産試験場青鵬丸通信士(新規採用)  
畠井 隆範 水産試験場青鵬丸(新規採用)  
石岡 春高 水産部参事水産増殖センター所長事務取扱(水産部参事栽培漁業公社派遣)  
植木 龍夫 内水面水産試験場長(水産増殖センターワン次長)  
林 義孝 水産増殖センターワン次長(海洋学院院長)

木村 大 内水面水産試験場調査普及部長（水産増殖センター海草部長）  
 塩垣 優 水産増殖センター総括研究管理員魚類部長  
 事務取扱（同魚類部長）  
 天野 勝三 内水面水産試験場研究開発部長（水産増殖センター総括主任研究員）  
 三戸 芳典 むつ水産事務所水産課長（水産増殖センター総括主任研究員）  
 桐原 慎二 水産増殖センター総括主任研究員（漁業振興課総括主査）  
 兜森 良則 漁業管理課総括主査（水産増殖センター主任研究員）  
 柳谷 智 水産増殖センター総括主任研究員（同主任研究員）  
 松坂 洋 水産増殖センター総括主任研究員（同主任研究員）  
 山田 嘉暢 水産増殖センター技師（むつ水産事務所大畠地方水産業改良普及所技師）  
 長崎 勝康 水産増殖センター技師（内水面水産試験場技師）  
 小泉 広明 水産物加工研究所技師（水産増殖センター技師）  
 田中 淳也 水産増殖センター技師（新規採用）  
 加川 弘 内水面水産試験場総務室長（水産増殖センター総括主幹）  
 松山 英春 漁政課主幹（水産増殖センター総括主査）  
 神保 和則 水産増殖センター総務室長（保健医療大学準備室室長補佐）  
 念代 琢人 水産増殖センター主査（漁業振興課主事）  
 田村 亘 漁業管理課技師（栽培漁業公社技師）  
 相坂 幸二 栽培漁業公社技師（青森地方水産業改良普及所技師）  
 原子 正大 栽培漁業公社総務室長（環境保健センター総務室室長）

## 秋田県

4月1日付

赤間健太郎 水産振興センター所長（水産漁港課長）  
 斎藤 誠悦 水産振興センターカー次長（農政部課長待遇）  
 杉山 秀樹 水産振興センター海洋資源部長（同資源部主任専門研究員）  
 工藤 泰夫 水産振興センター内水面利用部長（同環境部長）  
 佐々木 攻 水産振興センター資源増殖部長（同増殖部長）

岩谷 良栄 水産振興センター企画管理部主席専門員  
 （水産漁港課長補佐）  
 米谷 峰夫 水産振興センター企画管理部主席専門員  
 （同主任専門員）  
 船木 勉 水産振興センター海洋資源部主任専門研究員（水産漁港課長補佐）  
 安村 明 水産振興センター企画管理部主任専門研究員（水産漁港課長補佐）  
 川本 篤治 水産振興センター海洋資源部主任専門研究員（同資源部主任専門研究員）  
 佐藤 泉 水産振興センター海洋資源部主任専門研究員（同環境部主任専門研究員）  
 渋谷 和治 水産振興センター内水面利用部主任専門研究員（同増殖部主任専門研究員）  
 菅原 義也 水産振興センター企画管理部主査（議会事務局総務課主任）  
 笹尾 敬 水産振興センター海洋資源部専門研究員（同資源部専門研究員）  
 鈴木 俊男 水産振興センター海洋資源部千秋丸船長（同資源部千秋丸船長）  
 佐藤 清美 水産振興センター海洋資源部千秋丸機関長（同資源部千秋丸機関長）  
 伊藤 保 水産振興センター海洋資源部千秋丸通信長（同資源部千秋丸通信長）  
 加藤 政樹 水産振興センター海洋資源部第二千秋丸船長（同資源部第二千秋丸船長）  
 古仲 博 水産振興センター資源増殖部専門研究員（同増殖部専門研究員）  
 佐藤 時好 水産振興センター内水面利用部専門研究員（同増殖部専門研究員）  
 白幡 義広 水産振興センター資源増殖部専門研究員（同増殖部専門研究員）  
 伊勢谷修弘 水産振興センター内水面利用部専門研究員（同増殖部専門研究員）  
 伊藤 享憲 水産振興センター企画管理部主事（県税事務所主事）  
 奥村 紀男 農政部参事（水産振興センター所長）  
 筒井 敏夫 山本地方部副部長（水産振興センターカー次長）  
 遠藤 実 水産漁港課副主幹（水産振興センター企画管理部主席専門員）  
 柳田 幸栄 南部食肉衛生検査所主査（水産振興センター企画管理部主査）  
 宮崎 信作 水産漁港課くばた機関長（水産振興センター資源部主任）

鈴木 一之 秋田土木事務所主事（水産振興センター企画管理部主事）  
 佐藤 正人 水産漁港課技師（水産振興センター企画管理部技師）  
 奥山 忍 水産漁港課技師（水産振興センター資源部技師）

## 山形県

3月31日付

佐藤 久喜 退職（水産試験場海洋資源部長）  
 伊藤 靖志 水産試験場長（内水面水産試験場長）  
 鎌田 稔 水産試験場研究主幹兼副場長（庄内支庁経済部水産事務所資源管理主幹）  
 高橋 博 水産試験場総務課長（藤島農業改良普及センター総務課長）  
 菅原 恵子 水産試験場庶務係長（鶴岡保健所総務企画課総務係長）  
 今野 亘 農林水産部農林水産経済課水産室長（水産試験場長）  
 井岡 敦 内水面水産試験場長（水産試験場研究主幹兼副場長）  
 伊藤 清 鶴岡田川農業改良普及センター総務課長（水産試験場総務課長）  
 本間 建 県立温海高等学校事務長（水産試験場総務主査兼庶務係長）  
 菅原 雅直 庄内支庁経済部水産事務所主任航海士（水産試験場最上丸航海士）  
 舟橋 和宏 水産試験場研究員（新規採用）  
 佐々木祐介 水産試験場最上丸航海士（新規採用）  
 大澤 正 水産試験場海洋資源部長（同浅海増殖部長）  
 本間 仁一 水産試験場研究専門員（同主任専門研究員）  
 井口 雅陽 水産試験場浅海増殖部長（同主任専門研究員）  
 石向 修一 水産試験場主任専門研究員（同専門研究員）  
 阿部 信彦 水産試験場専門研究員（同研究員）

## 新潟県

3月31日付

富岡 紀久 退職（水産海洋研究所参事（栽培技術課長））  
 山吹 孝司 退職（水産海洋研究所参事（漁業課長））

4月1日付

丸山 勇 水産海洋研究所参事（海洋課長）（佐渡水産事務所長）  
 宮島 英雄 水産海洋研究所参事（漁業課長）（漁港課参事（課長補佐））  
 細谷 久信 水産海洋研究所栽培技術課長（内水面水産試験場病理環境課長）  
 遠藤 浩司 水産海洋研究所総務課主任（巻地域福祉センター主任）  
 加藤 和範 内水面水産試験場参事（病理環境課長）（水産海洋研究所増殖工学課長）  
 渡辺 健治 水産課副参事（指導普及係長）（水産海洋研究所栽培技術課専門研究員）  
 水戸部 守 新潟財務事務所主事（水産海洋研究所総務課主事）  
 佐藤 智則 水産海洋研究所加工課研究員（新規採用）  
 建原 敏彦 水産海洋研究所参事（増殖工学課長）（同海洋課長）  
 伊藤 敏晃 水産海洋研究所佐渡水産技術センター主任研究員（同研究員）

## 富山県

3月31日付

反町 稔 退職（水産庁養殖研究所病理部長）（水産試験場長）  
 4月1日付  
 中村 弘二 水産試験場長（水産庁中央水産研究所加工流通部加工技術研究室長）  
 横谷 賢二 水産試験場総務課長（魚津土木事務所総務課業務班長）  
 渡辺 健 水産試験場栽培・深層水課主任研究員（水産漁港課主任）  
 幅 寿悦 水産試験場漁業資源課（立山丸）主任（水産漁港課（つるぎ）主任）  
 吉森 尚美 水産試験場総務課主事（魚津県税事務所主事）  
 道田 孝 車両センター所長（水産試験場総務課長）  
 濱本八次朗 水産漁港課副主幹（つるぎ）係長事務取扱（水産試験場副主幹漁業資源課（立山丸）係長事務取扱）  
 大浦美由紀 東部家畜保健衛生所主任（水産試験場総務課主任）  
 高緑 真 水産漁港課技師（つるぎ）（水産試験場栽培・深層水課（はやつき）技師）

角 裕二 水産試験場栽培・深層水課副主幹研究員  
(同主任研究員)  
西浦 正 水産試験場副主幹・漁業資源課(立山丸)  
係長事務取扱(同漁業資源課(立山丸)  
係長)  
高田 弘基 水産試験場漁業資源課(立山丸)主任(同  
技師)

## 石川県

4月1日付

野村 元 水産総合センター生産部研究主幹(水産課  
主幹兼資源増殖係長)  
五十嵐誠一 水産総合センター普及指導専門員(水産課  
資源増殖専門員)  
大慶 則之 水産総合センター水産研究専門員(水産課  
漁業振興専門員)  
橋田 秀次 水産総合センター主任主事(珠洲農林総合  
事務所主任主事)  
時国 英子 水産総合センター主事(七尾高等技術学校  
主事)  
貞方 勉 農林水産部水産課長補佐(水産総合センター  
海洋資源部主任研究員)  
安田 信也 水産課資源増殖係長(水産総合センター係  
長(健民公社担当))  
永井 優 水産課技師(水産総合センター技師)  
新田町弘幸 畜産課主事(水産総合センター主事)  
梅田美千子 七尾高等技術学校業務主任(水産総合セン  
ター業務主任)  
沢矢 隆之 水産総合センター係長(健民公社担当)  
(同水産研究専門員)  
上田 恭子 水産総合センター主任主事(同主事)  
達 克幸 水産総合センター主任技師(健民公社担当)  
(同技師)  
増田 泰隆 水産総合センター主任技師(健民公社担当)  
(同技師)  
持平 純一 水産総合センター白山丸主任技師(同技師)  
畠下 雅浩 水産総合センター白山丸主任技師(同技師)

## 福井県

3月31日付

峰田 進 退職(水産試験場若潮丸船長)  
4月1日付  
松見 金幸 水産課若越技師(水産試験場福井丸技師)  
和田 晃治 水産試験場海洋資源部技師(新規採用)  
南 秀明 水産試験場福井丸技師(新規採用)

山田 敏博 水産試験場福井丸技師(新規採用)  
柴野富士夫 水産試験場若潮丸船長(同福井丸一等航海  
士)  
千田 友広 水産試験場福井丸一等航海士(同二等航海  
士)  
栗駒 治正 水産試験場若潮丸航海士(同二等航海士)  
川端 昭弘 水産試験場福井丸二等航海士(同若潮丸航  
海士)  
見本 俊和 水産試験場福井丸二等航海士(同甲板長)  
日形 知文 水産試験場福井丸二等機関士(同機関員)  
岡田 和裕 水産試験場福井丸甲板長(同甲板員)  
平瀬 数恵 栽培漁業センター技師(新規採用)

## 京都府

3月31日付

篠田 正俊 退職(海洋センター所長)  
増井栄次郎 退職(海洋センター総務部船舶課専門員)  
4月1日付  
桑原 昭彦 海洋センター所長(同海洋調査部長)  
宗清 正廣 海洋センター海洋調査部長(水産事務所普  
及指導課長)  
飯塚 覚 海洋センター海洋調査部主任研究員(水產  
課主任)  
西廣 富夫 水産事務所総括水産業専門技術員(海洋セ  
ンター海洋生物部主任研究員)  
井谷 匠志 水産課主任(海洋センター海洋生物部技師)  
濱中 雄一 海洋センター海洋生物部主任研究員(同海  
洋調査部主任研究員)

## 島根県

3月31日付

川上 熱輝 退職(栽培漁業センター生産開発科主任管  
理技師)  
岩本 宗昭 退職(水産試験場長)  
野田 勝延 退職(水産試験場島根丸通信長)  
4月1日付  
安達 二朗 水産試験場長(栽培漁業センター所長)  
中谷 秀晴 水産試験場総務課総務係長(浜田土木建築  
事務所主幹)  
青山喜久雄 水産試験場明風機関長(漁業管理課せいふ  
う機関長)  
若林 英人 水産試験場漁場開発科主任研究員(栽培漁  
業センター生産開発科主任研究員)  
開内 洋 水産試験場利用化学科研究員(松江水産事  
務所普及員)

山根 恭道 水産試験場鹿島浅海分場主任研究員（内水面水産試験場主任研究員）  
 橋 宣三 栽培漁業センター所長（水産試験場鹿島浅海分場分場長）  
 原田 孝治 高速道路事務所主事（水産試験場総務課主事）  
 砂廣 英人 漁業管理課せいふう機関長（水産試験場明風機関長）  
 沖野 晃 栽培漁業センター生産開発科研究員（水産試験場漁場開発科研究員）  
 勢村 均 栽培漁業センター生産開発科長（水産試験場鹿島浅海分場主任研究員）  
 堀 玲子 松江水産事務所普及員（水産試験場鹿島浅海分場研究員）  
 小村 治男 水産試験場鹿島浅海分場次長（分場長）（水産試験場利用化学科長）  
 西藤 秀夫 水産試験場島根丸通信長（同船舶通信士）  
 道根 淳 水産試験場海洋資源科主任研究員（同研究員）  
 井岡 久 水産試験場利用化学科長（同主任研究員）  
 島田 範明 企画振興部交通対策課企画員（栽培漁業センター総務主任）  
 森脇 晋平 内水面水産試験場生物資源科長（栽培漁業センター生産開発科長）  
 小松原喜幸 栽培漁業センター総務主任（農林水産部畜産振興課主任）

## 山 口 県

3月31日付

池田 武彦 退職（内海水産試験場長）  
 藤井 修正 退職（外海水産試験場水産専技）  
4月1日付  
 高山 繁昭 水産研究センター企画情報室長（水産課主幹）  
 受田 賢治 水産研究センター企画情報室水産専技（水産課水産専技）  
 岡本 芳顕 水産研究センターくろしお船員（漁政課りょうせい船員）  
 藤村 治夫 水産研究センター内海研究部長（外海水産試験場次長）  
 宮後 富博 水産研究センター内海研究部企画情報室水産専技（防府水産事務所普及主査）  
 大橋 祐 水産研究センター内海研究部専門研究員（外海栽培漁業センター）

石井 克哉 漁政課りょうせい船員（外海水産試験場くろしお船員）  
 辻岡 修 内海栽培漁業センター所長（内海水産試験場次長）  
 三浦 雅夫 内海栽培漁業センター総務課長（内海水産試験場総務課長）  
 安成 淳 防府水産事務所水産係長（内海水産試験場水産専技）  
 平岡三登里 漁政課主任技師（内海水産試験場研究員）  
 河本 学 水産研究センターくろしお船員（新規採用）  
 小川暁三朗 水産研究センター所長兼外海研究部長（外海水産試験場長）  
 光井 保元 水産研究センターくろしお機関長（外海水産試験場くろしお機関士）  
 小林 知吉 水産研究センター外海研究部資源増殖グループ主任（外海水産試験場漁業科長）  
 由良野範義 水産研究センター外海研究部資源増殖グループ主任（外海水産試験場水産増殖科長）  
 浅原 充雄 水産研究センター加工開発グループ主任（外海水産試験場水産加工科長）  
 檜山 節久 水産研究センター内海研究部資源増殖グループ主任（内海水産試験場資源科長）  
 高見 東洋 水産研究センター内海研究部資源増殖グループ主任（内海水産試験場水産増殖科長）  
 立石 健 水産研究センター内海研究部環境病害グループ主任（内海水産試験場環境化学科長）  
 桃山 和夫 水産研究センター内海研究部環境病害グループ主任（内海水産試験場環境生物科長）

## 日 水 研

2月14日付

藤本 實 退職（死亡）（所長）3月1日付  
 小川 嘉彦 所長（中央水産研究所企画調整部長）3月31日付  
 渡邊まゆみ 退職（日本海漁業資源部主任）  
 廣橋 昇保 退職（みずほ丸船長）4月1日付  
 坂井 友信 庶務課用度係長（遠洋水産研究所総務部会計課営繕係長）  
 中尾 律雄 みずほ船長（中央水産研究所こたか丸船長）  
 本間 和海 みずほ二等航海士（水産庁白萩丸甲板員）  
 鈴木 和幸 みずほ通信長（水産庁照洋丸二等通信士）  
 井本 勇 みずほ丸甲板員（北海道区水産研究所北光丸甲板員）

藤原 崇 みずほ丸甲板員（水産庁漁政部漁政課船舶予備員）  
 小嶋 吉高 北海道区水産研究所庶務課用度係長（庶務課会計係長）  
 平川 和正 養殖研究所飼育環境技術部長（日本海海洋環境部生物生産研究室長）  
 内田 靖志 北海道区水産研究所探海丸一等航海士（みずほ丸二等航海士）

鈴木 昭博 濑戸内海漁業調整事務所白鷺通信長（みずほ丸通信長）  
 山口喜久夫 北海道区水産研究所北光丸甲板長（みずほ丸甲板次長）  
 村上 美誠 水産庁白萩丸甲板員（みずほ丸甲板員）  
 川上 直樹 庶務課会計係長（同用度係長）

## 編集後記

今回の連絡ニュースには久しぶりにサケ科魚類の話題提供をいただきました。日本海におけるマスの流し網漁業が本格的に開始されたのは昭和32年で、全盛期には北海道を含めると500隻以上の漁船が流し網で主にカラフトマスを漁獲していました。漁業の隆盛とともに試験研究も盛んとなり、極前線漁場の研究や日本海マス一斉調査も大々的に実施されていた時代があったのは皆さんもご存知のことと思います。時代の流れとは言え、日本海のマス流し網やはえ縄漁業は衰退してしまい、日本海マス一斉調査などももう行われてません。一方、資源量の少なさから流し網漁業の主対象とは成りえなかったサク

ラマスの試験研究がその魚価の高さから沿岸域や内水面を中心に盛んに行われるようになっています。

当然のこととはいえ、生物個々の営みはこのような試験研究の変遷とは無関係に続いていきます。量は少ないと言えサクラマスは今も沖合いでも索餌回遊を行っていますし、カラフトマスは春季の日本海沖合い域での優占種で時々沿岸にも顔を出すのです。これからも日本海ブロックにおけるサケ科魚類の試験研究は変遷しながらも彼らの営みが続く限り脈々と行われることでしょう。Neave (1958) の説によれば日本海周辺海域はマスノスケなども含む太平洋サケ属祖先の故郷なのですから。

## 日本海区水産試験研究連絡ニュース No.387

平成11年6月15日発行

発行 日本海区水産研究所

〒951-8121 新潟市水道町1-5939-22

TEL 025-228-0451

FAX 025-224-0950

ホームページアドレス

<http://www.jsnf.affrc.go.jp/>

編集 日本海区水産試験研究連絡ニュース編集委員会

印刷 共立印刷株式会社

新潟市近江2丁目16番15号 (025-285-2711)